

連載シリーズ 京都市内博物館施設連絡協議会（京博連）加盟施設紹介

第6回 京都国立博物館

行きたい行きたいとずっ～と思っていながら中々行けなかった京都国立博物館で開催されていた、I COM京都大会開催記念 特別企画 「京博 寄託の名宝 ―美を守り、美を伝える―」 によりやうく8月31日に行ってきました。

京都国立博物館に入るのは、実に4年振りのことです。

琳派400年記念祭の年の「琳派 京（みやこ）を彩る」に2015年10月29日に入館して以来です。

2017年の開館120周年記念の「国宝」展では余りの人気でサラリーマン時代での週末の数時間待ちの行列に並ぶ勇気がありませんでした。Hi

さて、この特別企画 「京博 寄託の名宝 ―美を守り、美を伝える―」 は8月14日から始まったのですが、本当ならその初日、8月14日には会場の京都国立博物館の敷地内で記念局の公開運用を行う筈でした。

4月に記念局が開局して以来、出来る限り多くのI COM京都関連施設にて公開運用を行いたいと思い、この京都国立博物館様での公開運用を行う事は、本大会のある9月からの左京区・国立京都国際会館での運用と同等のメイン・イベントと捉えていました。

その為、早い段階から関係各所の方々と事前打ち合わせもさせていただき、実際に公開運用をするならこの場所！と言った、具体的な場所の下見までさせていただいていた程です。

しかし、残念ながらこの公開運用は実現に至りませんでした。

今回の記念局での予算枠が余りにも取れなかった為、どうしても必要な予算が取れなかった為です。

京都国立博物館・事業推進の担当者様ならびにI COM京都大会準備室の方々にも、公開運用がI COM京都大会のPRに繋がるということで施設使用料の助成までしていただける、という話までまとまっていただけに残念でした。

シリーズで紹介しているこの企画ですが、今回は特別企画 「京博 寄託の名宝 ―美を守り、美を伝える―」 を含めて京都国立博物館（以降、愛称でもある「京博」と略称）の紹介をさせていただきます。



メインゲートの南門 京博は結構な傾斜地に建てられています。東山麓には長谷川等伯の障壁画で有名な智積院が、南門の向いには三十三間堂があります。

『京博の存在意義』

京博のHP <https://www.kyohaku.go.jp/jp/>

では以下のように書かれています。

文化財保護法に規定する有形文化財を収集し、保管して一般の人々に見ていただき、あわせてこれに関連する調査研究及び事業を行うことにより、貴重な国民的財産である文化財の保存及び活用を目的としています。

こうした目的が定められた文化財保存の重要性が表面に出てきたのには理由^{わけ}があります。それが明治維新直後に急激な欧化政策を取ったり、神仏分離令や上地令という法的措置による廃仏毀釈という社会現象でした。

神仏分離令は明治新政府が神道国教化の方針を決め、これまで広く行われてきた神仏習合を禁止する為に出したもので、これをきっかけに全国各地で廃仏毀釈運動が起こり、各地の寺院や仏像・仏具などの破壊が行われたり、海外へ売り払われたりしました。

また、上地令は明治4（1871）年と明治8（1875）年の2回に亘って行われた、寺院と神社の領地没収です。清水寺は1/10以下に、東本願寺が半分以下の領地になったと言います。

こうした社寺などの文化財が滅失の危機にさらされた為、全国の中でも京都と奈良に文化財が多くあることから、明治22年 宮内庁は京都と奈良に博物館の設置を決め、京都帝国博物館として明治30年に開館しました。以来幾度かその名前を変え、所割も変遷してきました。

このように京都の社寺の文化財保護を使命として生まれた京博なのです。

その為、国宝に限っても館の所蔵作品27件に対して、社寺や個人から預かる寄託作品はその三倍以上の87件に上り（2014年現在）、東京国立博物館の国宝所蔵作品87件、寄託作品50件で比率が逆転するという、京都中から質の高い美術作品が集中していることが分かります。

通年開館、かつ全時代全ジャンルを網羅する常設展示こそ、館の基礎体力のバロメータである群を抜いた「常設展示力」なのです。

『文化財とは何か？』

それは、「文化財があるからこそ、文化は存在している」ということです。

文化財が仮に存在しなかったら・・・何かで消滅し、伝わってこなかったとしたら後世の様々な物に影響を与える事なく日本の伝統文化が存在しなかったことになるのです。

文化を語り、歴史を語ることが出来るのは、現在に文化財が伝わっているからなのです。

つまり、文化財は日本文化の根幹であり、だから我々は文化財を護り、継承していかなければならないのです。

文化財を保護することの意義はそこにあるのです。

『京博の施設・建物』

ここでは京博の主だった建物の紹介をしていきますが、明治古都館は現在免震改修他の基本計画を進めるため、展示は行っていません。



「明治古都館」

明治28年10月に陳列館（本館）が竣工し、明治30（1897）年に開館式が挙行され公開展示が始まりましたが、本館（現明治古都館）の設計は東宮御所や赤坂離宮など宮廷建築に多く関わった宮内省内匠寮^{かたやまとうくま}の片山東熊です。

彼は工部大学校の建築学科の第一期生ですが、2年後輩（土木科）にあたる琵琶湖疏水工事の立役者である日本の近代土木工学の礎を築いた田辺朔郎とは繋がりが深い人物でもあります。

実は片山の妻 鑑子^{てるこ}は田辺朔郎の実の姉であり、その関係もあってか、明治45年に竣工した琵琶湖疏水の九条山ポンプ場のポンプ室の設計も行っています。

（8N3MKK HPの http://hamradio.world.coocan.jp/m150/kk_kinky0924.htm
琵琶湖疏水を歩く その式 参照）

さてこの本館＝明治古都館は、左右対称の美しい様式（フレンチ・ルネッサンス様式）を持つ煉瓦づくりの平屋の建物で、正門（現在は団体入口）、同札売場及び袖壁が昭和44（1969）年に重要文化財に指定されました。

また、昭和55年には我が国初の総合的文化財修理専用施設として、文化財保存修理所が業務を開始しました。





京都国立博物館 明治古都館(明治28年竣工)



琵琶湖疏水 九条山 ポンプ室(明治45年竣工)

「技術資料参考館」

昭和5年旧恩賜京都博物館の陳列品収納用倉庫として建築されました。

平成20年に登録有形文化財に登録。

現在1階を会議やイベント控室として利用可能です。



「茶室 ^{たんあん} 堪庵」

昭和33年に個人より寄贈された、江戸時代初期 京都における公家文化の伝統を受け継いだ数奇屋造りの建物です。

母屋右側に三畳の茶室「堪庵」があり、大徳寺・真珠庵「庭玉軒」を写したとされています。

昭和41年に明治古都館南側から現在地に移築した際に屋根を銅板葺きに改め、庭等を整えて茶会等の利用に一般開放しています。

「平成知新館」

東京国立博物館や法隆寺宝物館などを手がけた世界的建築家・谷口吉生氏の設計により、平成26年9月13日に開館した新しい展示館です。

直線を基本とする展示空間では、収蔵品を中心に京文化を楽しんでいただけるようになっています。



館収蔵、寄託品あわせて約14,000件（平成28年度末現在）を数える収蔵品の中から陶磁・考古・絵画・彫刻など様々な分野にわたる文化財を「名品ギャラリー」にて展示している他、年に2回程度 特別展を開催しています。

名品ギャラリー〔平常展示〕：特別展開催期間中は名品ギャラリーは中止となります。

平成知新館は地上3階、地下1階で展示室全体を守る免震構造になっており、1階から3階までの各展示室の他、地下1階には最新の映像設備を誇る講堂（シアター）や庭を眺望出来るレストランなど魅力に溢れた展示館となっています。



1階入口を入ると広いロビーがあります。 入って左手にミュージアムショップがあり、タイミングがうまく合えば、京博の公認キャラクターの“トラりん”に逢えますよ。

1階西側にはレストラン「The Muses(ザ・ミューゼス)」があり、京都の食材を取り入れたビストロスタイルのお料理が堪能できます。大きなガラス壁面の窓から見える眺めも最高です。

「ミュージアム・ショップ等」

南門入口に付随する形でミュージアムショップ「京都便利堂」があります。美術ハガキや名品の複製品など数多くのミュージアムグッズを取り揃えています。



またカフェ 前田珈琲「京博店」は同じ南門入口にあってスペシャルブレンドコーヒーを始め、宇治抹茶を使ったスイーツなどが用意されています。

尚、この南門入口の2店舗は京博の入場券を買わなくても外から入ることが出来ますので、博物館の中を見る時間がない時や夜間拝観の時にちょっと立ち寄って休憩するのも良いでしょう。

勿論、美術鑑賞の休憩にと少し休んだ後、再び鑑賞に戻ったり、館外の美術品鑑賞に散策するのも良いでしょう。

「正門」

明治28年10月竣工。本館（現明治古都館）とともに昭和44年に重要文化財に指定された威風堂々とした門です。

敷地の西端に位置し、大和大路通りに面していて、現在は団体の入場時や閉館時の退室時に使われています。

ここから正面の明治古都館を眺めると、手前の噴水、その奥のロダン作「考える人」像が見事に一直線上に並んで見えます。



正門と平成知新館（左）



正門から噴水の後にあるロダンの「考える人」とその後方に明治古都館の正面

「番外編 日本赤十字社 京都府支部」

南門入口を七条通りを挟んだ反対側には、屋上にアンテナが乗った少し古くなった建物があります。

ここが日本赤十字社 京都府支部で、大昔はここでアマチュア無線の講習会がよく行われていました。

今では屋上のアンテナも傾いたままになっている所を見ると運用はされていないように見えますが、。。。。。



日本赤十字社 京都府支部

さて一応建物の紹介をざっと済ませたところで、今回訪れた ICOM京都大会開催記念 特別企画 「京博 寄託の名宝 ―美を守り、美を伝える―」も少し紹介しておこうと思います。

この企画は9月1日から7日まで、日本で初めて開催される世界博物館会議（ICOM）京都大会を記念して開かれるもので、今一度 京博に寄託された名宝を平常展示である「名宝ギャラリー」を中心に滅多に見る事が出来ない寄託品を合わせて展示する言わば「特別展」に近い形にしたものと捉えることが出来ると思います。

ICOM京都大会開催記念 特別企画
「京博 寄託の名宝 ―美を守り、美を伝える―」

今回の特別企画は、9月に日本で初となる ICOMこと国際博物館会議の世界大会が、京都の地で行われることを記念して開催することになったものです。

京博が開館当初は廃仏毀釈による文化財の毀損・遺失・海外流失などの危機に直面していましたが、それからおよそ120年経った現在は、洪水や地震などの災害が頻発する中において、寄託の意義が色褪せることはありません。

ICOM京都大会のテーマとなっている『文化をつなぐミュージアム―伝統を未来へ―』とも重なり合うものと言えます。

本展では、京都国立博物館に収蔵される6200余件もの寄託品の中から選りすぐりの名品を展示します。一昨年の「国宝」展に勝るとも劣らない美の極致をぜひご鑑賞ください。

パンフレットより抜粋

パンフレット（日本語版）

出品一覧（全139点）



ICOM 京都大会開催記念 特別企画
京博寄託の名宝 ―美を守り、美を伝える―

出品一覧
会期：2019年 8月14日(水)～9月16日(月・祝)
会場：京都国立博物館 KYOTO NATIONAL MUSEUM
〒600-8505 京都市下京区西ノ京

※作品はすべて複製図録にて、※複製は複製元の権利と一致しますが、展示の順序は一致しません。
※本展には古くは明治時代から現在までの、様々な寄託品が展示されます。
※展示の順序は複製図録と一致するものではありません。

番号	品名	時代	寄託元	展示場所	展示期間	展示順
1	24-1	陶器	奈良時代 吉野の土器	101	11月14日～11月16日	24-1 吉野の土器
2	24-2	陶器	奈良時代 吉野の土器	102	11月14日～11月16日	24-2 吉野の土器
3	24-3	陶器	奈良時代 吉野の土器	103	11月14日～11月16日	24-3 吉野の土器
4	24-4	陶器	奈良時代 吉野の土器	104	11月14日～11月16日	24-4 吉野の土器
5	24-5	陶器	奈良時代 吉野の土器	105	11月14日～11月16日	24-5 吉野の土器
6	24-6	陶器	奈良時代 吉野の土器	106	11月14日～11月16日	24-6 吉野の土器
7	24-7	陶器	奈良時代 吉野の土器	107	11月14日～11月16日	24-7 吉野の土器
8	24-8	陶器	奈良時代 吉野の土器	108	11月14日～11月16日	24-8 吉野の土器
9	24-9	陶器	奈良時代 吉野の土器	109	11月14日～11月16日	24-9 吉野の土器
10	24-10	陶器	奈良時代 吉野の土器	110	11月14日～11月16日	24-10 吉野の土器
11	24-11	陶器	奈良時代 吉野の土器	111	11月14日～11月16日	24-11 吉野の土器
12	24-12	陶器	奈良時代 吉野の土器	112	11月14日～11月16日	24-12 吉野の土器
13	24-13	陶器	奈良時代 吉野の土器	113	11月14日～11月16日	24-13 吉野の土器
14	24-14	陶器	奈良時代 吉野の土器	114	11月14日～11月16日	24-14 吉野の土器
15	24-15	陶器	奈良時代 吉野の土器	115	11月14日～11月16日	24-15 吉野の土器
16	24-16	陶器	奈良時代 吉野の土器	116	11月14日～11月16日	24-16 吉野の土器
17	24-17	陶器	奈良時代 吉野の土器	117	11月14日～11月16日	24-17 吉野の土器
18	24-18	陶器	奈良時代 吉野の土器	118	11月14日～11月16日	24-18 吉野の土器
19	24-19	陶器	奈良時代 吉野の土器	119	11月14日～11月16日	24-19 吉野の土器
20	24-20	陶器	奈良時代 吉野の土器	120	11月14日～11月16日	24-20 吉野の土器
21	24-21	陶器	奈良時代 吉野の土器	121	11月14日～11月16日	24-21 吉野の土器
22	24-22	陶器	奈良時代 吉野の土器	122	11月14日～11月16日	24-22 吉野の土器
23	24-23	陶器	奈良時代 吉野の土器	123	11月14日～11月16日	24-23 吉野の土器
24	24-24	陶器	奈良時代 吉野の土器	124	11月14日～11月16日	24-24 吉野の土器
25	24-25	陶器	奈良時代 吉野の土器	125	11月14日～11月16日	24-25 吉野の土器
26	24-26	陶器	奈良時代 吉野の土器	126	11月14日～11月16日	24-26 吉野の土器
27	24-27	陶器	奈良時代 吉野の土器	127	11月14日～11月16日	24-27 吉野の土器
28	24-28	陶器	奈良時代 吉野の土器	128	11月14日～11月16日	24-28 吉野の土器
29	24-29	陶器	奈良時代 吉野の土器	129	11月14日～11月16日	24-29 吉野の土器
30	24-30	陶器	奈良時代 吉野の土器	130	11月14日～11月16日	24-30 吉野の土器
31	24-31	陶器	奈良時代 吉野の土器	131	11月14日～11月16日	24-31 吉野の土器
32	24-32	陶器	奈良時代 吉野の土器	132	11月14日～11月16日	24-32 吉野の土器
33	24-33	陶器	奈良時代 吉野の土器	133	11月14日～11月16日	24-33 吉野の土器
34	24-34	陶器	奈良時代 吉野の土器	134	11月14日～11月16日	24-34 吉野の土器
35	24-35	陶器	奈良時代 吉野の土器	135	11月14日～11月16日	24-35 吉野の土器
36	24-36	陶器	奈良時代 吉野の土器	136	11月14日～11月16日	24-36 吉野の土器
37	24-37	陶器	奈良時代 吉野の土器	137	11月14日～11月16日	24-37 吉野の土器
38	24-38	陶器	奈良時代 吉野の土器	138	11月14日～11月16日	24-38 吉野の土器
39	24-39	陶器	奈良時代 吉野の土器	139	11月14日～11月16日	24-39 吉野の土器



南門入口には大きな看板でお出迎え。



平成知新館 1F を入って左が案内所
音声ガイドもここで貸出しています。

それでは、平成知新館 1F から入ります。

入って左手に総合受付があり、音声ガイドもこの手前で貸し出しを行っています。(¥500)

平常展示もそうですが、順序は3Fから2F、1Fへと上から下に降りて鑑賞するルートです。今回の企画は平常展示(名品ギャラリー)に寄託品の中々選りすぐったものが追加展示されているようです。

名品ギャラリーの展示は以下のような展示内容です。

- 3F 陶磁、考古
- 2F 絵巻、仏画、中世絵画、近世絵画、中国絵画
- 1F 彫刻、特別展示室、書跡、染織、金工、漆工

今回の特別企画では、

- 3F 陶磁(33点)、考古(9点)
- 2F 肖像画(4点)、仏画(8点)、中世絵画(4点)、近世絵画(7点)
- 1F 彫刻(19点)、中国絵画(9点)、書跡(12点)、染織(9点)、金工(7点)、漆工(18点)

という展示になっていました。

2Fの絵巻の代わりに肖像画が、同じく2Fの中国絵画が1Fの特別展示室に移された形になっています。

また、全139点の中で、国宝が36点、重文(重要文化財)が59点、重美(重要美術品)が2点という内訳ですが、中でも

- 肖像画 4点中 国宝1、重文2
- 中世絵画 4点全て重文
- 彫刻 19点中 国宝2、重文16
- 中国絵画 9点中 国宝4、重文4
- 書跡 12点全て国宝

等々素晴らしい作品ばかりで圧倒されます。

ご想像通りこれらの逸品は全て館内での撮影は禁止されていますのでお見せすることが出来ないのが本当に残念ですが、やはり素晴らしいものは2次元の写真ではなく、3次元の実物をご覧になると全く印象も迫力も違います。

是非、本物を見る機会があれば時間とお金を惜しまずに見に行ってください！！

今回 久しぶりに京博に来て感じたことがあります。

それは、年配の方はやはり多いのですが、結構 老夫婦やお子さんを連れた家族連れにももちろんカップルなど、私のように一人で来ている人が思った程多くない、ということでした。

8月の最終日で週末の土曜日です。時間は朝10時半過ぎでしたので決して早いという時間ではありませんでしたが、比較的すいていましたので、ゆっくり鑑賞しながら進んでいけました。

それとこれは全く知らなかったことなのですが、入場料のことで是非知って欲しいことがあります。

展覧会というとその入場料は安くても1,000円以上、高いものでは1,800円とか2,000円近くするものもあります。

しかし、今回は、“特別展”ではなく“特別企画”と銘打っており、展がない分、平常展示＝常設展の金額で入れます。

つまり常設展示（平常展示：名品ギャラリー）の金額で大人¥520（税込）でした。

それにもう一つビックリしたのが、京博の入場料は18歳以上70歳未満の大人だけで必要で、18歳未満及び70歳以上は無料です。

オマケに大学生は学校がキャンパスメンバーズに入っていれば、学生はもちろん教職員なども無料です。

子供から大人まで入場料がいると思い込んでいたのですが全くの無知でした。

どんどんお子さんを連れて行って本物を見せてあげて下さい！

特別展や企画が終った後、京博は常設の（名品ギャラリー）も準備が出来ていない期間が出てきます。

そんな時は敷地の庭園や外の展示物（前述のロダンの「考える人」など）だけ公開しています。

また、夏場の金曜・土曜日は21：00まで延長され、入場料はたった¥260です。

ちなみに特別展はその都度金額の変動はありますが、2015年の「琳派 京（みやこ）を彩る」展、2017年の「国宝」展は共に入場料は¥1,500でした。

尚、10月1日から消費税が10%になりますが、今の所入場料は変更しないとのこと。但し、図書目録などの刊行物や、施設利用料、画像使用料等は増税分金額が上がるようです。

ちょっと横道にそれてしまいました。

元に戻って寄託品の鑑賞に戻ります。

本当に沢山の見事な美術品の数々なのですが、そんな話を書くとキリがありません。

ここは泣く泣く限られた作品だけ、特に感銘を受けた作品 3点だけ紹介させていただきたいと思います。

- | | |
|------------|--------|
| 1) 伝 源頼朝像 | 神護寺 |
| 2) 風神雷神像屏風 | 建仁寺 |
| 3) 四季花鳥図 | 大徳寺大仙院 |

1) の肖像画「伝 源頼朝像」は神護寺三像（国宝）の内この頼朝像と、伝 平重盛像の2点が京博寄託されているものです（もう1点 伝 藤原 光能像は東京国立博物館に寄託）。近年では人物名や年代で諸説出てきていますが、間近で見ると1枚絹の着色画での特に黒い束帯の中の模様の細部に至るまで丹念に描かれていて、そ



れがまだ鮮やかさを保っているのはまさに驚愕の一言です。

そしてもう一つ驚かされたのがその大きさでした。

縦 143cm、横 112, 8cmとは実寸大の大きさと、隣に掛けてあった伝 平重盛像も同じ縦 143cm、横 112, 2cmあります。

等身大の掛軸は大きなお寺の本堂に掲げててしまえば大きさは気にならないかも知れませんが間近にみるとその迫力には圧倒されてしまいました。(人物の名前なんてもう誰でも良い、そんな気さえ起こさせてしまいます。

神護寺では毎年5月1日～5日までの間だけ、京博から里帰り(虫干し)して見る事が出来ます。

2) の風神雷神像屏風は2015年以来の実物を見る事が出来ました。

是非とも確認したいことがあって待ち望んでいました。

それはこの屏風を斜めから見て風神、雷神がどのように見えるか実際 自分の眼で見ることでした。

結果は思っていた通りで、斜めに見ることにより、2曲1双の屏風の左右の端に描かれている2つの像が屏風の中央部の金箔部分がほぼ消えて雷神と風神が並んで見えるのです。

特に左隻の雷神側から右隻の風神を斜めから見た時の方がより立体的に、雷神の背中の太鼓が浮き上がってきて風神の前に雷神がかぶさる様な構図となって目に飛び込んできました。

このように屏風という素材をうまく使って構図を作っているのではないかと初めて考えたのは、琳派400年祭の年に、東京・根津美術館で「^{かきつばた}燕子花図屏風」を見て気付いたことがきっかけでした。

何の変哲もない燕子花の配列(左右で若干密集度が異なる)と左右の隻での高さの違いが、屏風を斜めから見ることによって六曲一双の大きなスケールにより群生となって目の前に現われた時の感動は忘れもしません。

俵屋宗達のこの屏風は風神と雷神を真ん中に大きな空間を設けた大胆な描き方が雲の「たらしこみ」と同時にいかにも琳派らしさが出ている作品と言われていますが、私にはこの屏風を「斜めに見る」ことも立派に屏風の構造を利用した描き方であると確信しています。ですから私淑した尾形光琳もそれを「燕子花図屏風」で表現したのだと思っています。

建仁寺に高細精度の複製品が常に見れますが、残念ながら斜めから見ることは部屋の広さと構造上で出来ませんので、こうした博物館等で確認するしか方法がないのです。



尾形光琳「燕子花図屏風」

Wikipedia より



俵屋宗達「風神雷神図屏風」

Wikipedia より

3) の四季花鳥図は大徳寺塔頭・大仙院の寄託品で、今回初めて見ましたが、大変スケールの大きなものでした。

元々は襖絵だったのですが、現在は8幅の掛軸になっています。

描いたのは、狩野元信。狩野派初代狩野正信の子で狩野派繁栄の礎を築いた人物です。



四季花鳥図の中央部の2幅

Wikipedia より

8幅の内、中央から右4幅が 174.5×139.5cm、左4幅が 174.5×99.0cm と僅かに左の幅が狭くなっています。

中央部の滝を遠く離れて眺めていると、大きな松の木がず〜と手前に見え、滝がその奥から轟々と音を立てながら水を落としていっているかのようにこちらも立体的に見えてきました。

さらに、花鳥のみ施された濃彩が色彩効果を上げ、大自然を雄大に表しながらも、落ち着いた雰囲気漂わせていました。

今回は、偶然3点とも絵画になりましたが、皆さん美術鑑賞用の小型単眼鏡で展示品の間近から眺めては感嘆の声を漏らしておられる方も見受けました。

また熱心に展示品一つ一つの感想などをバイндаのメモ帳にメモされる方もおられました。尚、京博の展示室内の筆記具の持ち込みは鉛筆のみ許可されています。

シャープペンシルやボールペンなど、芯が硬くて折れにくいものは作品を傷つける可能性が大ということで使用不可です。

また気になった点では、作品の照明にLED照明が使われ、小型軽量でどんなところにも光を当てられることで、細部までより良く見えるようになり、且つLEDの光は熱を持たないので、作品を傷めることもなくなったようです。

但し、LEDは今迄の白熱系の光とは違う「色温度」を固有で持っている為、当てる作品によっては色が変わって見えてしまう、といったこともあり、どのような色温度がその作品に一番合うのか見極めて使う必要があります。

今回、比較的ゆっくり見て回ったつもりですが、平成知新館から表に出た時の時間は午後12時45分でしたので、丁度2時間ほど館内で鑑賞していたことになります。

外は天気も良く、もう少しのんびりしたかったのですが、お腹がすいてきたこともあり家に帰ることにしました。

今回は施設の紹介だけではなく、企画展もあわせて紹介した為に長文になってしまいました。しかし、文中にも書いたように、18歳～70歳以外は無料なので是非家族で一度訪問されてみてはいかがでしょうか？

改めて京都の文化を再確認することが出来、展示された作品が1日でも長く後世の人の目にも触れ、大切な文化財を守っていつてもらえればと願って止みません。

取材・文責 J H 3 M K P / 岡口

※参考文献等

- ・ 京都国立博物館 HP
- ・ 京都で日本美術を見る「京都国立博物館」 橋本 麻里著 集英社 2014/10/31 第1刷発行
- ・ 京都まるごと博物館・美術館 福地 義彦 編集 婦人画報社 1993/11/10 発行
- ・ 日本絵画の楽しみ方 完全ガイド 細野 正信 監修 池田書店 2007/12/28 発行

等々